

ニューファーマー達の農園組合(その2)

ー共同栽培・共同加工から地域おこしへー

しずくいし
雫石創作農園組合 福 本 敏

前号の項目

まえがき

I. 「雫石創作農園組合」をつくる

1. 雫石というところ
2. コテージむら農場
3. 「雫石創作農園組合」を結成
4. 特徴をもたせなければ…

II. 共同栽培・共同販売

5. 有機トマトの栽培と販売

III. 加工事業への進出

6. トマトピューレの加工と販売
7. “ふっくらこ豆”の加工と販売

IV. 地域振興事業を手掛ける

8. 町役場農林課からの持ちかけ

コテージむら農地は販売を停止している。以後もただ何もしないでほっておくだけでも、管理費や利子にお金がかかっている。

2001年1月町役場農林課から、「「雫石創作農園組合」で、いまのコテージむら施設を利用して、“雫石の食と職の発信”と“都市と農村の交流”の事業を考えられないか」、という持ち掛けがあった。

まだ充足して間もない、私達の「雫石創作農園組合」の力を、そこまで買っていていただいていると、本当にメンバー全員が嬉しかった。これには、年間80万円の補助金を出してもらえることとなった。

知恵をしぼって、3月に答を出した。メン

バーの能力も考えて、

- ・ “しずくいしギャラリー”
- ・ 食の体験…料理教室と農園
- ・ “コテージむら祭り”
- ・ 加工工房の充実…保健所認可の工事と生産性の向上対策

とした。

9. “しずくいしギャラリー”

雫石の自然と文化と職の発信として、「雫石在住の、ものづくりの人たちの作品展示場」をつくろう。首都圏などに出品したりコンクールに入賞したりしている、立派な人たちがせっかく雫石にいたので、なんとか地元でも作品が見られるようにしよう。これは、メンバー1人の長年いだいていた夢であった。

これも公社から、管理センター隣のモデルハウスを貸してもらった。周囲は牧草地、自然の中の美術館である。木工4人 織物 陶器 鉄器 漆器 染織 洋画家 空間デザイナー 計11人に、参加してもらうこととなった。

はじめはまだ来客数がよくつかめないので、受付係りなど人件費を考慮して、4月～11月の土・日・祝日の9時～5時に開くこととした。

空間デザイナーが加わって、ただ作品を並べるのではなく、生活の場を提案する展示という形に仕上げてもらった。花をいけたりし

て、しゃれた雰囲気で見やすくなった。周りの美しい景色を見ながら、テラスでコーヒーを飲めるようにした。コテージむらでの、ゆっくりした時間を楽しんでもらうためである。

オープンは、2001年7月20日(日)。11月終わりまでのあいだ、約2000人に来ていただいた。半分が盛岡の人、残り1/4づつが雫石と全国各地の人であった。

ゆくゆくは、体験製作教室も開く計画である。また、木工のテーブルに陶器や鉄器をつかって、われわれの農産物の料理を食べていただく。これは、農業と芸術の組み合わせの一例であり、早く実現したいものである。

10. 食の体験…料理教室と農園

食の体験として、まず体験料理教室と体験農園を考えた。料理教室や体験農園は、あちこちでいっぱいやっている。今から始めるわれわれは、よっぽど特徴をもたせなければならぬ。

分かりやすくするため、“豆のある暮らし”というテーマを軸にすることとした。豆なら有機栽培・特産品加工・ギャラリーという、われわれの今までの栽培と加工とうまくつながる。

料理教室は、企画・宣伝・準備・教室助手・後始末と、いっぺんに始めるにはわれわれに大変だ。これには、雫石の大規模ガーデニング・ショップ花工房が、毎月開いているハーブ料理教室と共催させてもらうこととした。実際は豆の教室の2回は、共催というより丸抱えで運営してもらった。そのほか、役場の料理教室などの企画に呼んでいただいた。会場は町内の教室設備。組合メンバーの奥さん

達が、料理の先生をした。

私達が先生をした教室のテーマは、ハーブ入りシフォンケーキ、豆入りパン、豆入りキッシュ、カレー、味噌が2回だった。

豆といえば味噌となるのか、味噌教室は盛況だった。盛岡の若い人や地元農家の奥さんも参加してもらい、2回も実施した。このときは、会場はコテージむら管理センター。せまい台所だったがいい景色の中で、1年前に仕込んだ出来上がり見本の味噌料理を満喫して、好評だった。

一方体験農園の方は、組合メンバー2人の農園で、それぞれ30㎡の5区画づつ、計10区画を準備している。2002年春にオープン予定である。

このうち1人の農園分は、“豆のある暮らし”というテーマで体験農業をしてもらう意味で、体験者全員それぞれ約半分の面積で共通の豆をつくってもらう。それを料理教室で体験加工して、一緒に食べてもらうことも企画している。栽培から食卓までをいっしょに経験して、食べ物を通じたつながりを持てたら、と考えている。

11. “コテージむら祭り 01”

これは、コテージむら初めてのイベント。

はじめどうなることかと思ったが、大成功。

“雫石の発信”と“都市との交流”を目的に、ギャラリーや体験教室を含めて、都市の人にはたくさん来てほしい。でもその前に、雫石の地元の人たちにも、コテージむらを知ってもらうことも必要だ。

こんな願いで“コテージむら祭り 01”は、メンバーの1人の、企画から実行にいたるまでほとんどを、顔の広さとすごいエネルギー

で進めてもらった賜物である。

2001年9月30日(日) 12時より17時まで。管理センターとギャラリーのある地域を中心に、多くのチームが参加したコンサートと舞踊、たくさんの店を出してもらったフリーマーケットと飲食店、管理センター内の温泉の無料解放等、盛り沢山の華やいだ雰囲気だった。

好天に恵まれて、家族連れ地元グループなど、子供からお年寄りまで、あの狭いところに約1000人もの人たちに来てもらった。

大盛況だったのにくわえて、みなさん好評で、「ぜひ来年も」と期待してもらった。

12. 「雫石創作農園組合」の運営

2年目の2001年、組合員の数もはじめからの5軒から11軒にふえた。加わってもらったのは、元の仕事が消防・不動産・製薬・職業指導の人達、現役の保険業、地元の農家の奥さんの6軒である。

2001年7月に雫石の道の駅が、ここから約20分の盛岡～秋田間国道の雫石町西端にオープンした。温泉もある大規模施設である。私達も、ここの「産直しずくいし」組合に参加して、季節ごとの野菜やトマトピューレ・“ふっくらこ豆”の加工品を出荷している。一部



コテージむら祭り 01

の人は、ここの「日本ハーブ」組合にも参加している。

役場などのルートから、テレビ・新聞・雑誌・ラジオなどのメディアが紹介され、取材にきていただいた。テーマは、有機栽培、特産品開発、ギャラリー、コテージむら祭りなど。なんかいやっても、テレビ撮影の本番では神妙になってしまう。忙しいので、本放送の時を見る機会があまりなく、勿体ない気がした。

クッキングトマトは、“なつのこま”から“盛岡28号”へ切り替えた。収量と加工容易さから、大玉品種にしたためである。トマトの栽培技術は、元普及員のメンバーがみんなの畑の巡回や指導してくれるなどして、早期種まきによる7月出荷と、ハウス栽培による病気の減少で、前年より大きく技術が進歩した。しかし、クッキングトマトの量販店出荷が、販売不振で8月中旬にストップになった。

2001年の加工事業は、トマトピューレに“ふっくらこ豆”が加わったため、売り上げがほぼ倍増となった。ただしどう利益をだすかは、依然頭の痛い問題である。コストの殆どが人件費と光熱費、要するに生産性が悪いことにつきる。さらに加工工房のスペースのせまさ、加工の人手をどうするかなど、難しい問題がだんだん溜ってきた。

あとがき

自然の美しさ、人々の親切。栽培・加工・販売・食べ語りなど農業の持つ魅力、もわかった。ギャラリーをもつなどで「雫石創作農園組合」も小さいながら、ほんの一部だが認めてもらったようだ。

この農業の魅力を多くの人に知ってもらい、農業とギャラリーの芸術を組み合わせた、雫

石の文化センターをつくってゆこうと、夢はふくらむ。

その一方で、小さいながら「雫石創作農園組合」も一つの組合。収益をあげ経営管理を整えてと、キッチンと運営せねばならない。3年目の問題点をみんなで相談して、進めてゆかねばならない。

夢と現実の間で、農業軸と地域振興の間で。大きな自然の中で、小さな胸をときめかせて

いる、今日この頃である。

まえがきにも触れましたが、経験の浅いニューファーマーの私達。「こうしたほうがいいよ」というアドバイスがありましたら、ぜひ教えて下さい。（おわり）

雫石創作農園組合

代表 福本 敏

〒020-0573

岩手県雫石町南畑28-132

電話・FAX 019-695-2197

ジャガイモと映画 『ホタル』、『マンホール』、 『男はつらいよ』

邦画ではなかなかジャガイモの出るシーンに出会うチャンスがない。

わが国でのジャガイモ消費量は、1人年間17キロほどしかないから、数倍食べる国と比較して、当然と言えば当然のことだ。

かつて『いも侍』のタイトルにひかれて、映画をみたことがあったが、サツマイモのことでがっかり。北海道ではジャガイモを『いも』と呼ぶので、『いも姉さん』に対する『いも兄い』ぐらいを期待して見たが、まだジャガイモもサツマイモも見たことがない人が多い時代の侍の出てくる映画だった。

そんな話を、あるワインを楽しむ集いのおりに映画に詳しい札幌の横田昌樹さんに話したところ、『邦画にもあるよ』と話してくれたのが、『ホタル』と『マンホール』。

『ホタル』は、降旗康夫監督、高倉健、田中祐子の熱い愛と勇気を与える映画。多くの方は健のセリフ「二人で一つの命じゃろうが」に関心があるのでしょうが、私にはかつての戦友が南富良野からジャガイモを送るシーンに関心があった。

『マンホール』という映画は、鈴木貴之監督、安

田顕、三輪明日美らが出演するもの。女子高生の希と勤勉実直な小林正義の設定で、その真面目な警察官をしている小林の処へ帯広にいる母親から新ジャガが送られてくる。警察官として真面目に勤務する青年がその生真面目さゆえに自分のホームページの中で援助交際に走った女学生を戒める書込みをする。それをたまたま見た女学生が警察官に逆切れしてパソコンストーカーとなり、警察本部へ嫌がらせをし始める。そうした経過の中で郷里からジャガイモが届き、持って行き場のない気持をジャガイモにぶつけるのだとのことである。タイトルは、願いが叶うという噂の“夢のマンホール”に由来し、舞台は札幌地方になっている。

2002年元旦、おせちも雑煮も食べることなく、腸閉塞のため入院するハメになった。これが幸いして、山田洋次監督の有名な映画『男はつらいよ 寅次郎忘れな草』を寝ながら見ることができた。この時のマドンナ役はリリーこと浅丘ルリ子。寅が網走市郊外の酪農家を手伝って柴又に帰ってくる。そのとき旅で出合った歌姫リリーが『とらや』を訪ねてくる。その夜の歓迎の宴で、テーブルに粉ふきジャガが盛られていた。この山は戦中を想い出させるほどの量。寅はカラーテレビはないが、「人を愛する気持ちがあるから」上流階級なのだと語るが、ジャガイモもこれをサポートしていた。

（ポテトエッセイスト 浅間 和夫）